



交通の利便性が良く、周辺環境にも恵まれ、自然と調和したニュータウンで、快適な空間が生み出されています。



暮らしやすい快適な住宅整備。それは、まちの人々の生活を、より豊かに変えていきます。私たちは、人と家と環境の調和を考えた夢づくりを進めます。



まちが恩恵を受けてきたきれいな川に、きれいな水を返したい。恵まれた自然環境をこれからも守るため、排水施設整備に力を入れています。



まちの地域・生活情報などを交換しあうコミュニケーションシステムとして、「オフトーク通信」を実施。まちが一体となった情報通信網を育てています。



純粋な笑顔がはすむ子供たち。まちの快適な生活環境をみんなの力で築きあげていったとき、その笑顔はさらに輝いていくことでしょう。

新聞や古雑誌、あきびんなどのリサイクルが、町の祭りへの参加資金にならないか——それがすべての始まりだった。北町町内会では当時、長沼まつりに参加しようとしたところ、ねぶたづくりに必要な費用を町内会費では負担することができなかった。「どうしようか」と悩んでいた樋口さんの目に、町の広報誌に掲載されたリサイクルの特集が飛び込んできた。そこで役場に相談し、ゴミの収集を行政区内のみならず他地区の子供会でも噂を聞きつけて、ゴミを持ってきてくれた。最終的には、四七車に積みきれないほど、かなりの量が集まった。思った以上の成果を挙げ、当初の目的は果たした。しかし、この経験を通して、それ以上の「収穫」を得たことに、彼女たちは気づいていた。「ゴミの割りふりはどうすればいいのか」「町でゴミをストックする大きな場所や、ゴミの収集所を増やせないか」……そのような、いままで見えていなかった問題に、そのとき初めて目を開くことができたという。

そしてその後、新しい形でのゴミ収集がスタートした。毎月、第三土曜日の学校帰りに、小中学校の子供たちが袋を持ってゴミを集めるようになったのだ。これには地区担当の先生も協力していただくようになった。そして、やがて高校の生徒たちもゴミを集めるようになった。「ランドセルを背負った小さい子供たちがゴミを拾ってるんですもの。高校生や

大人たちも「きれいにしなくちゃ」と思いますよね」と、大原さんはほほえむ。行政でしなければならぬこと。それはそれで存在する。しかし、そこでやり切れないことで、自分たちは何ができるか……それを考え、行動に移した。その一つが「プラカード作戦」。「ゴミを捨てるな」「スピード出さない」といったプラカードを、子供たちも

ってバイパス道路に立ち、PR活動を行った。こうしてクリーン作戦は、町に定着していった。自分たちの町をきれいにしたい、という思いが、「どうすればゴミを減らせるか」「リサイクルできる資源ゴミはないか」という具体的な取り組みへと変わるのに時間はかからない。北町町内会では、定期的なビラ配布などの広報に加え、分別収集のための説明会を開き、地域ぐるみの活動を開始した。「しっかりとした情報さえあれば、きちんとゴミを出してリサイクルに役立てたいと思っている方はたくさんいると思うんです。遠藤さんはそう語る。そして、これらの活動に呼応するかのようには、「容器包装リサイクル法」が導入されると、細分化でのゴミの減量がかたちとなって表れてきた。分別収集開始からわずか十カ月で、町全体の不燃物ゴミの収集量をなんと約六割まで減少することができたのだ。この成果は決して偶然などではない。一人ひとりの自覚が町をより快適な環境に変えてゆく。その奔流はこれからも続いていくにちがいない。

